

わらべうたが親子間における愛着に与える影響

山本由紀子・内田 晋子*

研究実績の概要

乳幼児と親を対象にわらべうた遊びの実践を行うことで、親子の愛着に影響があるかを明らかにすることを目的とし、2019年度から継続して平安女学院大学の内田氏と共同研究として進めた。2019年度は子育て支援施設において、わらべうたを使ったふれあい遊び（わらべうた講座）を実施した。わらべうた講座の前後では、親子のコミュニケーションに関する10項目の質問紙調査を行った。さらに、わらべうた講座に継続参加をした参加者に対する育児不安尺度（吉田、2013）を用いた質問紙調査とインタビュー調査を行った。研究協力者はのべ111組であった。

2020年度は2019年度に得られた結果の分析および、学会発表や論文投稿の準備や執筆を行った。親子のコミュニケーションに関する10項目について、初回参加者（67名）の回答を対象に探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。因子数は、固有値の減衰パターン（4.167、2.796、0.866、…）、および因子の解釈の可能性を考慮して2因子とした。第1因子は「どのように～しているか分からない」という項目が多く、「困惑」と命名した。第2因子は「笑い合う」「触れあって遊ぶ」など関わりについての項目が多いため「コミュニケーション」と命名した。 α 係数は第1因子が.896、第2因子が.861で内的整合性は高いと判断できた。

さらに、参加者の傾向を検討する目的から、単回参加者と複数回参加者の初回回答に対して、対応のない t 検定を行った。のべ111名の研究協力者のうち、67名を分析対象とした。その結果、困

惑因子 ($t(18.79) = -1.54, n.s.$) とコミュニケーション因子 ($t(24.60) = -0.25, n.s.$) に有意差はみられなかった。そこで、項目ごとの t 検定を行った結果、「子どもとどのように遊んだらいいのか分からない」という項目において有意であった ($t(19.68) = -2.20, p = .040$)。今回の実践は予約制ではなかったが、複数回参加した参加者は子どもとの遊び方に困り感を抱えていた可能性が示唆された。また、インタビュー参加者は複数回参加者でもあるが、個別の困惑得点の変化を確認した結果、困惑得点が高かった参加者ほど、複数回参加後の困惑得点の下がり幅が大きかった。

これらのことから、親子のわらべうた遊びは子どもへの困り感が強い親ほど大きな影響を与える可能性が考えられる。ただし、子どもは日々成長しているため、困り感の変化がわらべうたの影響だけであるとは一概には言えない。また、愛着を調べるには継続的な観察も必要である。より困り感の大きい参加者を対象とすることで、その影響も調べやすいことが明らかとなったことから、今後も引き続きわらべうた講座および調査研究を計画していきたいと考える。

*客員研究員 平安女学院大学